

# コンサートに来ませんか

財団法人読売日本交響楽団  
理事長  
**横田弘幸**  
Hiroyuki Yokota



「あの震災で肉体を失い、今は魂だけとなった方のために——」

昨年十二月六日夜、福岡市の福岡シンフォニーホール。鳴りやまない約千七百人の熱い拍手を制して読響特別客演指揮者の小林研一郎さんが、語りかけた。

「ダニーボーイをアンコール曲に」

ブラームスの「交響曲第一番」などを約二時間にもわたって指揮した後、小林さんはこのアイランド民謡を犠牲者への哀悼の意を表するたぐいに選んだのだ。小林さんが十年来の愛用のタクトを振る。弦楽器だけによる演奏が静かに、心を込めて、地震や津波で命を奪われた人々の

魂に呼びかけ、そして難を逃れた人々の祈りを歌いあげた。

心ふるわせるような弦の響きでコンサートホールが満たされる。熱いメッセージが客席に伝わってきた。思わず目が潤む。聴衆の万感の思いが空間に交錯し、ぶつかり、そして和して歌った。

こうした感動は、指揮者や演奏家の鍛え上げた技術だけによってもたらされるものではない。コンサートホールの空間が予想以上に大きな働きをしているのだという。オーケストラの奏でる音をいかに豊かな響きとして聴衆の耳に送り届けるか。クラシック音楽にとって、ホールは

演奏では一・五秒から二秒程度と長い残響が求められている。

そもそもオーケストラの演奏会では、マイクやスピーカーなどの音響装置を使わずに、生の音を聴衆に聴いてもらう。そのためまず外部の音は遮断しなければならぬ。そのうえで大事なことは、力一杯の演奏だけでなく、消え入りそうなピアノシモの演奏も聴衆によく伝わることだ。

日常性の排除された特別の空間を溢れんばかりに満たし、響き合う音。高い、高い天井からも降り注ぐ。まさに至福の時間だ。

もうひとつ忘れてはいけないのが視覚の大切さである。指揮者の振り上げたタクト、一斉に動くバイオリン奏者の弓、次の動作へと緊張する打楽器奏者——。こうした楽団の動きを音楽とともに目にすることができるとも、音楽会のだいご味といえるだろう。

演奏者の後ろ側の席も興味深い。指揮者の表情、動作がよく見え、指揮者がこめた思いが伝わってくる。

名曲体験の感動はホールの作りによっても違いがある。上から見ると長方形の「シューボックス型」のコンサートホールはまるで神殿のよ

うな敵かさだ。ステージの周囲に客席が展開するすり鉢状の「アリーナ型」は客席が一体となって盛り上がる。

さて、そのコンサートホールが深い沈黙の中に沈んだのが、昨年三月だった。

十一日が東日本大震災。読売日本交響楽団では十四日夜の公演は中止し、昼公演でもある十九日、万全の態勢で東京・池袋の東京芸術劇場の扉を開けた。

千人を超えるお客様が来てくれた。震災前のチケット販売では千六百人以上の来場者が見込まれていたが、震災直後のことである。余震が続く中、よくぞこれだけ来て下さった。本当にありがたかった。

開演冒頭に黙祷を捧げた。節電のため普段よりも照明の落とされた大ホールで全員が目を開じた。全員が深い、深い海の中に沈み込んでしまったかのようにだった。その後、読響正指揮者の下野竜也さんの指揮でバッハの「G線上のアリア」が演奏された。客席で目にハンカチを押して当てる人の姿も少なくなかった。

大災害に人々は心の底から動揺し、それでもコンサートホールに足を運んでくれたのだ。昨年暮れの小林研一郎さんの「ダニーボーイ」で

もう一人の主人公、あるいはもう一つの楽器とさえいえるのだ。

ともかくコンサートホールは贅沢な建物だ。客席の上に広がる大空間。四階、五階、あるいはそれ以上の高さまでも吹き抜けとなっている。経済性のうえでは、各階にフロアーを設け、事務所を入れるなりした方がよさそうだが、あえて吹き抜けにするのは音響のためだ。

響きすぎてもいけないし、ほどよい残響があつて初めて豊かな音となる。残響時間は、空間の容積が大きいほど長くなり、室内の吸音素材が多いほど短くもなる。要はその塩梅だ。ホールの規模によっても異なるが、オーケストラの

も感じたことだが、音楽には人間を揺り動かす「力」がある。これは間違いないことだ。

実は、それだけに残念なのが、演奏会に足を運んでくださる方たちに若い世代が少ないことだ。昨年の読響公演でのアンケート結果では、来場者の五五%が六十歳以上だった。二十歳代から四十歳代までの、若手現役世代は二〇%しかいなかった。

確かに、学生時代は時々演奏会に出掛けていたという人が、会社勤めになって、全く出掛けることがなくなつたという話はよくある。おそらく多忙な現役世代の生活パターンの中に、音楽会が入り込めないでいるのだろう。

仕事が忙しくて開演時間に間に合わない。業務が終わっても付き合ひがある。子供の面倒をみてくれる人がいない——など。

それでも、私たちは若い世代をお誘いしたい。「月に一度くらいは聴きにきませんか」と。

コンサートホールで、押し寄せてくる分厚いオーケストラの響きの波に身をまかせてはみませんか。安らぎと慰めと、励ましと、何かを得られるはず。

ストレスを一番感じている「今」だからこそ、心の栄養剤が必要なはずですよ。